

ホームレス問題を考える 19

絆は温かいもの。でも痛みを伴う覚悟で関係しなければ真の絆は生まれない

奥田知志さん

社会福祉法人グリーンコープ副理事長。NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長。ホームレス支援全国ネットワーク代表



90年代に起こっていた社会構造の変化が、リーマンショック以降急激に経済が悪化したことで、社会の脆弱な部分に一気に露呈してきました。当時派遣村などの状況について、「住まいと職を失った」と表現されましたが、絆を失ったことが一番大きい問題だと思っています。日本社会の困窮には大きく3つあって、①経済的困窮、②身体的困窮、③関係の困窮です。①②についてはこれまで社会保障制度によって補填されている面もありましたが、③は今日的で、より深刻な新たな課題です。若年ホームレス者の問題は関係や絆を失った人々の問題であると言えます。

絆が壊れると、いざという時に助けてくれる人がいないというだけでなく、自分が何者で、何のために生きているか分からなくなることを意味します。人は他者との関係の中で自分の存在意義を見出すのだと思います。抱樸館福岡の利用者が、北九州の炊き出しに参加したいと申し出ています。「ありがとう」という一言を、絆を求めていると思います。一方通行ではない関係が求

められています。抱樸館をやっていくということは、支える、支えられるという相互性の中で、双方が存在意義を見出していくこと、その積み重ねに挑戦していくことだと思っています。絶対的な受容なくして、人と人との関係、自己表現は成り立ちません。関係性の困窮は、社会的に弱い立場の人だけでなく、全体にあります。絶対的な受容には痛みが伴います。原木をそのまま抱きとめるという意味である「抱樸」に通じるものです。ある意味で傷つく、痛みを伴う覚悟がな

くては人と本当に関わることはできません。一方、これまでの日本では身内の責任論が強く、地域がみんなで見守るような考え方が弱かったと思います。そこを越えるものを抱樸館が示していると言えます。グリーンコープはホームレスの人たちと関わる痛みをみんなが背負うこととしたのです。リスクを分かちあっても関係性というところでも踏み出したのだと思います。これは新しい社会の創造です。

2009年4月からはじまったこのシリーズも最終回となります。抱樸館福岡開所から半年を目前に、この取り組みの意味、今後の展望について、行岡理事長、奥田副理事長、青木館長に語っていただきました。

この抱樸館福岡を拠点に、人と人との絆を紡ぐ豊かな第二地域づくりの実践がはじまっています。そして、その取り組みを通して、私たち一人ひとりの組合員が真に支えあい、助けあう関係性を築いていくことを実感していくこととなります。

抱樸館福岡は小さいけれどこれからの日本の希望の灯台になれば

行岡良治さん

社会福祉法人グリーンコープ理事長



ホームレス問題に象徴される現代社会の病理は、近代的価値観の破綻の現れだと思えます。本来、人は関係性の中に生まれ落ちてくる存在です。関係性の中で、人は人として生き、そのパーソナリティを形成していくのです。ですから、人は本来、関係性を共有しており、分かりあえる存在なのです。ところが、近代的価値観は、他人を分かりあえないブラックボックスのようにとらえました。そして、他人を外在的に改造していかねばならない存在と理解しました。グリーンコープが貫いてきた「連帯」は「無条件にお互いを受け入れていく」ことを意味しています。そ

して、それは近代的価値観を根本的に批判することを意味していました。それは、人は外在的にしか関係できないとする近代的価値観に對して、人は内在的に関係し、分かりあひ、連帯できる存在である、ということを実証しようとする闘いを意味していました。私はそして今、世の中は折り返し地点にきているように思います。人と外在的に関係しようとする近代的価値観がこのように破綻し、人が内在的に連帯し、助けあう社会がこれから新しく生まれていく、その折り返し地点に、私たちは立っているのです。

その端的な現れこそ、私たちと奥田さんたちとの出会いにほかなりません。グリーンコープはこれまでグリーンコープの中で築いてきた豊かな関係性を外に向かつて、地域に向かつて、表現すべき時を迎えていたのです。抱樸館福岡の建設・開所を検討していく過程や開所式などで見受けられた組合員の微笑みは、そのことを表しています。社会福祉法人の理事長としてとても嬉しく感じました。地域再生の柱として、抱樸館のような地域の拠点がたくさんできていき、ホームレス者に限らず、高齢者や障がい者、子どもたちが希望を持てるような、温かい社会へ向かっていけたらと思います。

抱樸館は関係そのもの。人と人との関係の問題が問われている中でその存在意義は大きい

青木康二さん

抱樸館福岡館長。NPO法人北九州ホームレス支援機構施設事業部長、抱樸館福岡準備室長を経て現職



開所から4カ月、延べ75人の利用者がありました。中には成人前の人もいて、9割程は50代以上であったこれまでのホームレス支援と違うことに戸惑いを隠せません。若年層の利用者と接してきて、ここまで人と人との関係が壊れているのかと驚いています。リーマンショック以降の、仕事がない状況も深刻ですが、親や兄弟もいる若年層で、家族や地域のつながりさえ絶たれてしまっていることに、本質的な問題があるように思います。連帯と抱樸は「無条件でお互いを受け入れる」という点で同じことを言っていると思います。スタッフ若い利用者から要望が噴出することを受け止め切れないうちもありません。しかし、「そういう自己表現が許される空間である」と抱樸館が利用者を感じられていることの裏打ちだと、思っています。いろいろと要求や不満を出していた利用者から「スタッフの方とここにいる仲間と出会えたこと」で独りではないと初めて思えました」という手紙ももらいました。利用者自身に問題に気づいてもらいたいと真剣に叱責の言葉を掛けたら「今まで本気で自分を叱ってくれた人はいなかった。これからお父さんと呼ばせてください」と言われました。抱樸館で再生を画ろうとしている人たちがいかにこれまで自分を出せる関係性がないままにいたのか、その問題の根の深さに思い至りました。「人は人との関係なしでは生きられない」。抱樸館で自分をそのまま受け入れてもらえることで、自己表現をはじめた利用者。言ってくれたことを、人と人との関係のはじまるチャンスだと思ひ、受け止めています。そうしたことを通じて抱樸館の意義をスタッフ自身が確認しているような気がします。

絆が人を生かすから……抱樸館の挑戦